

2025 年度日本語教育学会 論文賞 受賞コメント

橋本 ゆかり（横浜国立大学・教授）・鈴木 朋子（同）

この度は『日本語教育』論文賞という栄誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。ご講評を拝読し、拙稿を完成させるべく探究と思索を重ねてきた歩みに光を当てていただいたことを知り、大きな喜びを感じております。何よりも、微力ながら、外国につながる子どもの教科学習に関わる課題に寄与できましたことに、特別な想いを抱いております。



学校現場を訪問すると、教員、支援の方々から、「日本語の問題なのか、学力の問題なのか、あるいは発達障害によるものなのか判別が難しく、支援に戸惑っている」という声をよく耳にします。本研究は、こうした現場の実態に触れたこと、そして学校側から「専門的立場からの知見がほしい」という切実な要望をいただいたことがきっかけとなっております。

しかしながら、この問題に深く切り込むにはいくつかの壁がありました。日本語教育と心理学という、両分野を横断しなければ解決が難しい課題だったからです。両分野を往還する形で研究・分析を進めましたが、既存の心理検査については、先行研究において複数の問題が指摘されていたため、それらを本研究でどう扱い、どう配慮すべきかという点に腐心しました。特に両分野における視点の違いや検査間の項目・用語の重複をどう整理し、編み直していくのが大きな課題でした。加えて、学力、日本語能力、認知機能、性格といった関係性について、理論を援用しながら、どう関連付けてアセスメントとの対応を示しつつ精緻化した論考にまとめ上げていくのかについて、模索と思考錯誤を繰り返しました。

研究成果としては、グレーゾーンにいる子どもの能力の見極めと支援方法について多くの示唆を得ることができました。特に重要だと確信したのは、多角的側面から子どもを捉えることです。今後は、日本語能力、認知能力だけではなく、個人の認知方略や母国での行動規範、性格、表層では捉えられない心理的側面なども含めた包括的支援モデルを提案していきたいと考えています。また、本研究を通して、支援の方向性が見えることが教員や支援者の自信につながるという肯定的な影響も確認できました。一方で、具体的な支援策を現場で実施できる体制の不足など、新たな課題も見出されました。科学の発達により検査方法もさらに洗練されていく中で、それらを運用することも考えています。外国につながる子どもたちが、その能力を存分に発揮し、豊かな人生を送れるよう、引き続き力を尽くして参る所存です。

最後になりますが、本研究は、さまざまな方々のお力添えより成り立っております。協力児と保護者、小学校長、養護教諭・特別支援コーディネーター、在籍級担任教員、国際教室担当教員の先生方からご協力を賜りました。そして丁寧な査読をしてくださいました先生方、2024 年度日本語教育学会春季大会においてご質問やご意見をくださいました皆さまにも、この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。